慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「Essential Japanese 1M-1, 2」授業報告： 初級前半レベルの日本語遠隔授業における課題の振り返り
Sub Title	
Author	石野, 由梨子(Ishino, Yuriko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2021
Jtitle	日本語と日本語教育 No.49 (2021. 3) ,p.117- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	授業報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20210300-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』49：117–128（2021.3）

「Essential Japanese 1M-1, 2」授業報告

―初級前半レベルの日本語遠隔授業における課題の振り返り―

石　野　由梨子

1.　はじめに

本稿では、筆者が 2020 年度秋学期に担当した「Essential Japanese 1M-1, 2」の授業報告を通じ、初級前半レベルの日本語授業を遠隔で行うにあたって課題となった点を振り返る。まず、「Essential Japanese 1M-1, 2」の授業概要を説明し、次に具体的な授業内容を紹介する。続いて今回の授業運営における主な課題とその改善策を検討し、最後に今後の展望を述べる。

2.「Essential Japanese 1M-1, 2」授業概要

「Essential Japanese 1M-1, 2」は Keio Japanese Courses（以下 KJC）に設置されている科目であり、慶應義塾大学に在籍する留学生が日本語を学ぶためのコースである。KJC の日本語科目には初級・中級・上級の 3 つのレベルがあり、初級レベルは更に K1～K4 の 4 レベルに分かれている。筆者の担当する K1 レベルは初めて日本語を学ぶ学生を対象としている。

2.1　使用教材および学習進度

2020 年度秋学期の「Essential Japanese 1M-1, 2」では、『みんなの日本語初級Ⅰ本冊　第 2 版』（スリーエーネットワーク）の 1 課から 12 課まで表 1 のような学習進度で進めた。第 12 回は期末試験を行った後で 12 課を学習することから、全ての文型は扱わずに文型 1, 2（形容詞と名詞の過去

表 1　2020 年度秋学期「Essential Japanese 1M-1, 2」授業進度

回	学習課と主な学習項目
1	ガイダンス、1 課　名詞述語文
2	2 課「これ／それ／あれ／どれ」
3	3 課「ここ／そこ／あそこ／どこ」
4	4 課　時間、「（時間）から（時間）まで　V ます」
5	5 課「（場所）へ　行きます／来ます／帰ります」
6	6 課「N を　V ます（他動詞文）」
7	中間試験（1～6 課）、7 課　授受動詞
8	8 課　形容詞
9	10 課　存在文
10	11 課　助数詞
11	9 課「N1 は N2 が　好きです／あります／わかります」
12	期末試験（7～11 課）、12 課文型 1, 2　形容詞と名詞の過去形

形）のみを扱った。

2.2　履修者数および国籍

学期開始前に行われた履修申告の段階では、22 名の履修希望者がいた。通常であれば、K1 レベルの日本語科目として日吉キャンパス設置の「Essential Japanese 1H」が開講されるが、20 年度秋学期は開講されなかったため、日本語初学者の希望が集中したものと思われる。オンライン授業では対面授業より学生の状況が把握しにくいことから、抽選を行うことも検討したが、学期開始後に履修を取りやめる学生が出ることも予想されるため、経過をみることにした。履修申告科目の追加・削除期間後には 19 名になり、初回授業には 16 名の学生が参加した。この期間に履修を取りやめた学生は、ひとまず登録したものの、時差や専門科目との関係で履修を断念したようだった。初回授業後、さらに 2 名が時差やひらがなが未

表 2　2020 年度秋学期「Essential Japanese 1M-1, 2」受講者の国籍内訳

中国	フランス	イギリス	オランダ	トルコ	香港	計
6	4	1	1	1	1	14

習であることを理由に履修を取りやめたため、最終的な履修者は 14 名となった。履修者の国籍の内訳は表 2 の通りである。

2.3　開講時間

「Essential Japanese 1M-1, 2」は 2 科目セットであり、金曜日の 1, 2 限に設置されていた。学期開始当初、履修者は全員自国から受講していたため、欧州からの受講者は深夜に受講しなければならず、時差の負担が大きかった。時差に対しては特に配慮しないことをシラバスに明記していたが、履修者の半数が時差の影響を大きく受けていることから、授業の進め方を工夫することにした。時差への対処については 6.1 で詳しく扱う。

3.　授業形態

授業は Web 会議システム「Zoom」を利用したリアルタイム配信授業と授業時間内にオフラインで実施する課題を組み合わせる形で行った。2.3 で述べたように、リアルタイム配信授業は時差の影響を受ける欧州の学生にとって負担が大きいことから最大 120 分程度に収まるよう調整し、所要時間約 60 分の課題の提出をもって出席扱いとすることにした。

3.1　リアルタイム配信授業

対面授業と同様に口頭で出席確認を行った後、すぐに学習課の文型導入を行った。初級科目では、授業の最初に前回の復習クイズなどを行うことが多いが、今回は次の 2 点の理由から実施しないことにした。①遠隔授業ではクイズの回収に時間が掛かるため、全員の回収を待っている間に学生の集中力が落ちてしまうことを避けたかった。②深夜に受講している学生

の状況を鑑み、速やかにその日の学習を進めることが重要と考えた。とりわけ②については、今回の授業運営において対面授業にはない工夫が他にも必要になった。学習課の導入や練習は、全て筆者作成の Power Point（以下 PPT）のスライドに沿って行った。授業の進め方については 4. で詳しく紹介する。授業の最後に Zoom のファイル送信機能で課題を送付し、リアルタイム配信の授業を終了した。

3.2　オフライン課題

課題は学習内容の定着を確認する問題で、学生にはノートに答えを手書きして写真を提出するよう指示した。タブレットとタッチペンがある場合は紙媒体の宿題のように問題 PDF に直接書き込んでも良いことにしたが、タイピングは不可とした。「Essential Japanese1M-1, 2」は金曜日の 1, 2 限に開講されるため、当初は 2 限終了時刻までの提出をもって出席扱いとすることを想定していたが、初回授業でその旨を伝えると、欧州から受講している学生たちから、時差の関係で授業後すぐに課題を行うことが難しいという相談があった。そこで、時差の負担がある学生については翌日（土曜）の午前 9 時まで提出期限を延ばすことにした。課題は翌週月曜の午前 9 時に一斉返却し、理解不足がある学習項目については正しい答えをノートに書きなおして再提出するよう指示した。課題の提出、返却および再提出は全て授業支援システムのレポート機能を通して行った。課題の他に宿題を課すことも検討したが、初学者にとっては課題の負担がやや大きいこと、また次週に向けた予習も必要となることなどを考慮し、返却された課題の復習と書き直し、『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説英語版　第 2 版』による次の学習課の語彙・文法の予習を宿題と位置づけた。また、学生の半数以上が同レベルの技能別科目にあたる「Spoken Communication 1」または「Written Communication 1」を履修していたため、これらの授業に向けて語彙や文法を覚えることも宿題とした。

4. 授業の進め方

授業は教室での対面授業と同様に学習文型の導入と練習を繰り返す形で行った。その際、絵カードと板書の扱いを工夫する必要があった。そこで、3.1 で述べたように絵カードと板書を兼ねる PPT スライド作成し、スライドに沿って授業を行った。スライドの作成にあたっては、著作権者の承諾を得たうえで『みんなの日本語初級 I 絵教材 CD-ROM ブック　第 2 版』に収録されたデータを使用し[1]、必要に応じて著作権フリーのイラストなども活用した。本章では、①文型導入、②文型の口頭練習、③学習内容の確認、の流れに沿って授業内容を紹介する。

4.1 新出文型の導入

授業では、まず絵教材のスライドを見せながら口頭で新出文型を導入した。最初はイラストのみで文字情報は入れず、学生には聞き取りに集中してもらった（図 1 参照）。次に導入文を追加して文字でも文型が確認できるようにした（図 2 参照）。

通常の授業と同様にノートテイキングの習慣をつけさせるため、学生には授業のスライドは配付しないことを周知した。また、何か質問があれば、ノートを取る時間に質問してもらうことにした。授業の進行に慣れてくると、学生たちは徐々に自発的に質問するようになり、遠隔とはいえ双方向授業ならではの活気が生まれた。

続いて導入文をリピートし、ノートを取る時間を設けた。スライドにはリピートを意味する口のアイコン、ノートテイキングを意味するペンのアイコンを表示するなどして、学生がその時するべきことを視覚的に理解できるよう心がけた（図 3 参照）。

4.2 文型の口頭練習

文型の口頭練習では、通信状況によっては音が途切れるなどして教師のキューが聞き取れないことがあるため、練習用のスライドを共有しながら練習を行った（図 4 参照）。

図 1[2]　「どこへ行きますか（5 課）」導入①
（イラスト出典『みんなの日本語初級 I 絵教材 CD-ROM ブック 第 2 版』）

図 2　「どこへ行きますか（5 課）」導入②（同）

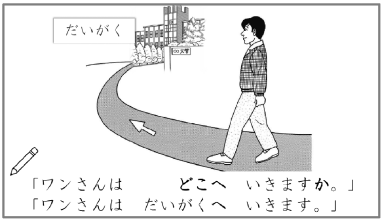

図 3　「どこへ行きますか（5 課）」導入③（同）

図 4 ではイラストが全て表示されている状態であるが、実際には口頭でキューを出すと同時にアニメーション機能を使用して該当するイラストを個別に表示し、練習しながら語彙が定着するよう工夫した。

授業中の口頭練習は全体で一斉に行い、通信不良や音声のタイムラグによる時間のロスを防ぐため、基本的に学生一人ずつの練習は行わなかっ

図 4　「どこへ行きますか（5 課）」練習（同）

た。また、学生はマイクをオフにしたまま練習を行い、教師はカメラで学生の口元を確認しながらタイミングを見てキューを出した。マイクをオンにせず練習を行ったのは、マイクの操作などで学生の気が逸れたり、時間のロスが生じたりすることを防ぐためである。口頭練習の方法は、今回課題となった点でもあるため、6.2 で詳しく振り返る。また、学習課の最後の練習には学生自身が答えを考えられるような問題を入れ、学生を指名して個別に答えてもらうことで定着状況を確認した。

4.3　学習内容の確認

学習課の文型導入と練習が全て終わると、その日の学習文型を音読して内容を確認した。その際、学習の要点を簡単におさらいし、ポイントを意識して課題に取り組めるよう心がけた。漢字学習については学生間の負担や興味の度合いに大きな差があったことから、授業では簡単な説明にとどめ、自習用の教材を配付した。スライドや宿題、試験問題中の漢字には全てルビを振り、宿題や試験での学生の漢字の使用は任意とした。

5.　試験について

中間試験・期末試験ともに、対面授業の試験と同形式のペーパーテストを行った。学生には Zoom のファイル送信機能で試験を配付し、制限時間内にレポート機能から提出させた。提出方法は課題と同様、紙に答えを書

いて写真をとるか、問題 PDF に直接書きこむかのどちらかで、タイピングは不可とした。遠隔での実施となるため、他の形式も検討したが、初級前半レベルで応用力を問う問題の出題が難しいことから、制限時間を厳しく設定することで不正防止策とした。普段の課題の評価と比較して不自然な結果は出なかったため、特に問題なく実施できたものと思われる。

6. 課題の振り返りと改善策の検討

筆者が初級前半レベルの日本語の遠隔授業を担当したのは、2020 年度春学期に続いて 2 度目である。20 年度春学期の担当科目は、今回担当した「Essential Japanese1M-1, 2」の次のレベルにあたる「Essential Japanese 2H」（学習範囲『みんなの日本語初級Ⅰ』13～23 課）であった。20 年度春学期は遠隔授業の実施が急遽決まったという経緯から、履修者が 4 名の小規模なクラスで、学生は全員日本国内に滞在していた。そのため今回は、受講者数や学生の受講環境に合わせた工夫が必要となった。中でも課題となったのは、①時差への対処、②練習方法、③学生との関係構築、の 3 点である。本章ではこの 3 点を振り返り、今後の授業運営に向けた改善策を検討したい。

6.1 時差への対処

学期開始当初に最も大きな課題となったのが、時差への対処である。基本的に時差への配慮はしないという方針であり、時差を理由に受講を断念した学生もいるため、公平性の観点から授業録画のオンデマンド配信は行わないことを周知した。履修者は全員その点を了承して受講しているものの、半数以上の学生が時差の影響を大きく受けていることを考慮すると、やはり何らかの配慮が必要だと思われた。そこで既に述べたように、授業を効率的に進めることや、課題の提出締切りを延長することで対処した。学期開始直後は苦労している学生が多かったが、約 1 ヶ月後には欧州の学生を中心に 7 名が来日し、時差の影響を受ける学生は少なくなった。来日

後の学生は、生活リズムが整うためか表情が明るくなり、また日本語環境に身を置くことで学習意欲も高まるようだった。今回はこのような形で自然に時差の問題が解消されたが、今後も学生が国外から受講する可能性は高い。そこで、リアルタイム配信を基本としたうえで、受講環境に応じて授業録画のオンデマンド配信も自由に選択できるようにすることを検討している。しかし、使用教材の著作権や学生の肖像権など考慮すべき点も多いため、慎重に進めていきたい。

6.2　練習方法

筆者が 2020 年度春学期に担当したような少人数のクラスでは、遠隔授業とはいえ対面授業のような練習形式、つまり最初は全体で一斉に練習し、次に一人ずつ発話を確認するといった口頭練習が行えた。中には既習内容の定着が悪く、回答に時間のかかる学生もいたが、少人数のため当該学生が答えるのを待つことが可能であった。しかし今回は、比較的履修者数が多く、また約半数の学生が深夜の受講を余儀なくされていたため、授業開始時の集中力を維持したまま、最後まで受講してもらうためにテンポ良く授業を進める必要があった。そこで、学生が学習内容以外のことに気を取られる時間（例えば、マイクのオン・オフを切り替える操作に手間取ったり、全員一斉に練習する際に誰かが発声するまで待ったりすることなど）をなくすため、マイクをオフにしたまま練習を行うことにした。限られた授業時間の中でなるべく効率的に練習を進めるための方法ではあったが、実際に行ってみると発見も多かった。

最大のメリットは、タイムラグなどによる待ち時間が発生せず、効率的に練習が進められた点である。カメラの映像で学生の口元を確認しながら、非常にテンポ良く練習することができた。映像から言い淀みなども確認できたため、複数の学生がうまく言えていない場合には繰り返し言わせるなどの対応も可能であった。また、他の学生の発話が聞こえる状況では、皆が言い終えると発話の遅い学生も気後れして途中でやめてしまうこ

とがあるが、他の学生の状況を気にする必要がないため、全員きちんと最後まで発話する様子が確認できた。反対にデメリットは、やはり学生の発話を聞いて確認することができないという点である。毎回、授業の最後の練習では学生を個別に指名して応答する時間を設けたが、カメラ越しには正しく言えているように見える学生でも、実際の発話を聞くと直すべき点があるということもあった。また、指名された学生は緊張しつつも嬉しそうに答えることが多く、学生の達成感という観点でも対面の練習には及ばないと感じた。

以上のように課題も残るが、テンポ良く練習が進められたためか、学生が飽きて注意散漫になるということはほとんどなく、学生たちは授業全体を通して真剣な表情で画面に集中していた。今回の経験を活かし、今後はタイミング良く個別の応答も取り入れるという形で改善していきたい。

6.3　学生との関係構築

時差への対応と同様、授業内容とは直接関係のない問題であるが、やはり遠隔授業は教室での対面授業に比べて学生との関係構築が難しいと感じた。教室では、授業の前後や休み時間に短い会話を交わすことで、学生の状況を把握することが可能であるが、遠隔授業では学生の状況が分かりにくく、変化や不調を見落としがちである。そのため、基本的なことではあるが、授業前後の学生への声かけや課題返却の際のコメント、欠席した学生へのメール送信など、学生が安心して授業に参加できるよう信頼関係の構築を心がけた。また、リアルタイム授業終了後も 2 時限目の終了時刻まで教師はオンライン状態を維持しておき、質問や相談があれば、いつでも Zoom に戻って来られるようにした。学生は学期開始時には緊張した様子であったが、徐々に画面越しに笑顔が確認できるようになり、学期の半ばにはだいぶ和やかな雰囲気で授業が進められるようになった。とはいえ、学生同士が気軽に会話できるような環境ではなかったため、学生間の交流は教室での対面授業に比べると圧倒的に少なかった。国籍の異なる友人た

ちとの出会いも留学の大きな目的の一つであることを考えると、今後は学生同士が打ち解けられるような工夫も取り入れていきたい。

7. まとめと今後の展望

本稿では 2020 年度秋学期の「Essential Japanese1M-1, 2」における授業運営上の課題を振り返り、改善策を検討した。直説法を使用した初級前半レベルの日本語授業では、説明に使用できる語彙が少ないため、絵カードやジェスチャーなど言語以外の要素に頼らざるを得ない。しかし、Web 会議システムを利用した遠隔授業では伝達できる情報に制限があるため、見せ方や伝え方、練習方法に工夫が必要となる。今回の授業運営においては、PPT スライドの活用や練習方法の変更など、教室での対面授業にはない要素を取り入れることで対応を試みたが、改善の余地は大きい。学生が主体的に参加することができ、理解の促進にも役立つような練習方法を取り入れていきたい。また、学生が自国に留まりながら日本の大学の授業を受けるという流れは今後も加速する可能性がある。その場合、時差があっても受講できるよう授業の配信方法を検討することや、直接会うことができない学生との関係を構築する工夫なども必要になるだろう。言語教育の場合、遠隔授業は対面授業に敵わない部分も多いが、今後もオンラインの特性を活かした授業作りについて考えていきたい。

使用教科書

『みんなの日本語初級 I 本冊　第 2 版』（2012）スリーエーネットワーク編著、スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説　英語版　第 2 版』（2012）スリーエーネットワーク編著、スリーエーネットワーク

使用教材・イラスト出典

『みんなの日本語初級 I 絵教材 CD-ROM ブック　第 2 版』（2012）スリーエーネットワーク編著、スリーエーネットワーク

注

1 学期開始前にスリーエーネットワークのホームページからオンライン授業での絵教材の利用について問い合わせ、利用申請フォームに従ってオンライン利用申請を行った。履修者が『みんなの日本語初級 I 本冊　第 2 版』を各一冊購入することを条件に、著作権者からオンライン授業でのデータ利用の許諾を得た。

2 本文中の図 1～4 は、サイズの縮小に合わせて PPT スライドのレイアウトを若干変更し、カラーをモノクロに変えている。